

利根川のほとりで 育まれた歴史

栗橋宿

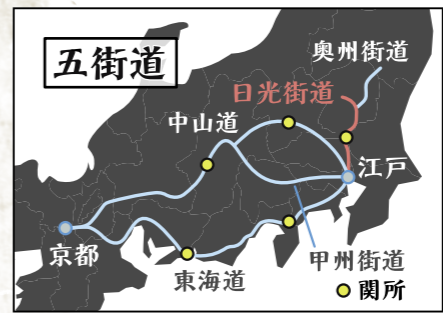
今から約400年前、江戸から日光へ至る主要道路として日光街道が整備され、その宿場町の一つとして栗橋宿が設置されました。栗橋宿の最大の特徴は、日光街道で唯一の関所が置かれていたこと。他の宿場町には見られないこの交通史的特徴を中心に、栗橋宿の歴史を紐解いていきます。

時はさかのぼること江戸時代、幕府は重要な交通政策の一つとして、現代にもその名を色濃く残す五街道を整備しました。当時は馬を使った通信輸送手段が最速だった時代。馬を迅速に走らせるために、馬と貨客を継走する伝馬制度が作られ、江戸と各地を結ぶ街道には、馬の継走と旅人たちの休息の場として、宿場町が設置されました。

そして、現在の久喜市内にも存在した宿場町。それが、日光街道の起点・日本橋から数えて7番目の宿場町として整備された「栗橋宿」です。利根川を挟んだ対岸の中田宿とともに、宿場の機能を分担していた当宿。当時の様子を伝える書物には、「農業の間に旅籠屋（食事付きの宿屋）を営んで旅人の休泊を受け、食物を商う茶店があり、その他に諸商人が

多い」とあります。また、栗餅を商う店が2軒あり、この地の名物とされていたとか。

平成24年から令和4年まで発掘調査が行われ、陶磁器や漆塗りのお椀といった生活用品から、建築に用いられた腐材など、当時の様子をうかがわせる遺物が多数出土しています。天保14年（1843）の調べでは、栗橋宿の人口は1,741人、家の数は404軒、旅籠屋は25軒で、現在の埼玉県の日光街道の宿場としては、杉戸宿に次いで規模が小さかったとされます。しかし、栗橋宿には、他の宿場とは明らかにその様相を異にする特徴がありました。日光街道で唯一、関所が設置されていたことです。



日光街道（日光道中）

江戸時代に整備された五街道の一つで、日本橋から現在の栃木県日光市までの21宿からなる全長約140kmの街道。江戸幕府の開祖である徳川家康を祀る東照宮のある日光へ、歴代将軍が参拝する際に通行した街道として特に重要視された。



栗橋関所を再現した模型
(久喜市立郷土資料館にて展示)

日光街道唯一の関所と房川渡し

栗橋関所（正式名称…房川渡中田関所）の成立は、寛永元年（1624）、4人の番士が幕府から任命され、同年に関所の建物が新築されたことによるとされています。関所番士は2人1組で午前6時ごろから午後4時ごろまで旅人の通行の取締りを行い、緊急時には例外的に夜間通行を認めていました。庶民の男性は、不審な点がなければ通行は

容易であったことが知られています。が、武器類や女性の通行については、関所通行のための許可書である手形が厳重に調べられました。

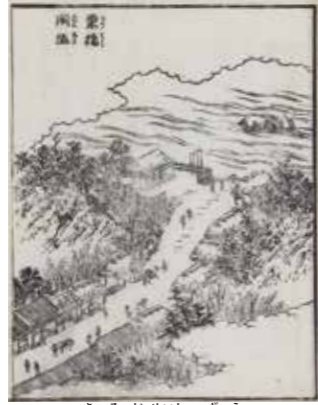
また、当時、河川は軍事的にも通行上大きな障壁であったことから、江戸幕府は橋を架けさせなかつたとされ、利根川においてもそれは同様でした。そのため、利根川を挟んで対岸の中田宿までは渡し船が往來し、これを「房川渡し」と呼びました。江戸周囲の五街道に置かれた関所は特に厳重に取り締まられましたが、その中でも栗橋宿は、関所と渡船場の二重の関門であった点に特徴があります。

慶応4年（1868）、新政府は全道の街道に関所などの設置を禁止する法令を出し、明治2年（1869）、

関所は廃止となりました。栗橋関所のあった位置は、現在は利根川河川敷となっており、その痕跡を見ることはできませんが、利根川橋のやや上流部付近と考えられています。大正13年（1924）に地元の人たちによって「栗橋関所址」碑が建てられました。この碑が目標物となって、現在、「栗橋関跡」として県の旧跡に指定されています。



歌川広重『日光道中栗橋』
(埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵・提供)



『木曾路名所図会』
(久喜市立郷土資料館蔵)
栗橋関所などが描かれている。



『日光道中絵図』 (国立公文書館蔵)
文政8年（1825）に予定されていた、11代将軍徳川家斉による日光社参に備えて描かれた栗橋宿の街並み。

こぼれ話

大名の妻女は人質？ 関所設置

3代将軍徳川家光は政治的統制のため、諸大名に対し一定期間江戸に住まわせる参勤交代を義務付け、江戸屋敷に妻女を置くことを課した。「入り鉄砲に出女」という言葉があるように、関所は江戸防衛上、武器類の流入と妻女が江戸から逃げるのを防ぐための危機管理だったといえる。

不正通行は重罪！ 関所破り

享和元年（1801）9月、奉公先から大金を盗んで女と逃亡した男が、栗橋関所を避けて内国府間村（幸手市）から船で川を渡り、関所抜けをした。今市宿（日光市）で捕まった男は栗橋関所に送られて磔になり、この時大勢の群衆が見物に押し寄せたという。

一時的に橋がかかることも 船橋架橋

将軍が家康を祀る日光東照宮へ参拝する際、通行で最大の障壁となる利根川には船橋が架けられた。川に船を並べて上に板を敷くなど、架橋は大工事であった様子がわかるが、一般の通行は許されず、将軍が日光から戻ると直ちに撤去された。



『中古倭風俗 日光御社参 栗橋渡し船橋之図』
(久喜市立郷土資料館蔵)

松尾芭蕉も通った 「幸手を行ば 栗橋の関」

この句は、松尾芭蕉が奥の細道の旅から4年後の句会で詠んだ連句の一部。旅に同行した弟子の河合曾良が残した「曾良旅日記」の元禄2年（1689）3月28日の記事で、「この日栗橋の関所を通る。手形も断りも入らず」と、関所を普通に通行できたことを少し驚きをもって記録している。